

ニホンナシの露地栽培で発芽不良を軽減する管理技術

2009 年春季にニホンナシの発芽不良が西南暖地を中心として広域的に発生しました。この障害はこれまで加温ハウス栽培でみられていましたが、この年の発生は露地栽培が中心でした。そこで、ニホンナシの露地栽培において、発芽不良の原因解明を行い、発芽不良を軽減する管理技術を開発しました。

☆ 技術の概要

1. 露地栽培におけるニホンナシの発芽不良は、12 月の高温や 10 月の過剰な窒素施用により発生が助長されます。結果枝の資質としては 120cm 以上の長大な長果枝で発芽不良の発生が多く、短果枝で少ない傾向があります。「新高」において、落葉前の 10 月に尿素や元肥を施用すると発芽不良が助長されます。
2. 「新高」において、主枝・亜主枝の潜芽から発生した長果枝（直接枝）と、予備枝の葉芽から発生した長果枝（予備枝由来枝）の冬季の腋花芽の耐凍性（-10℃、16 時間処理時の腋花芽の枯死率で調査）は、予備枝由来枝の方が強くなります。そのため、「新高」の長果枝では、予備枝由来枝の方が、直接枝より発芽不良の発生が少なくなります。
3. 露地栽培におけるニホンナシの発芽不良は、落葉前の 10 月の肥料施用を控えること、結果させる枝は、短果枝が着生した枝を中心に使用し、長果枝を結果枝として使用する場合は、予備枝由来枝を使用することで発生を軽減できます。

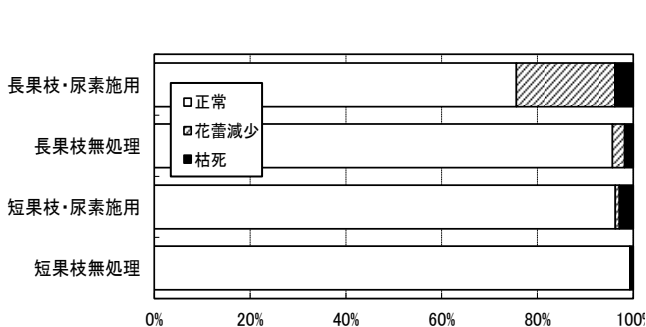


図 1. 「新高」における 10 月尿素施用による長果枝・短果枝側枝の発芽不良発生状況（2013 年）

注 1) 供試樹は「新高」40 年生

注 2) 尿素は窒素成分で 40 kg/10 a を施用

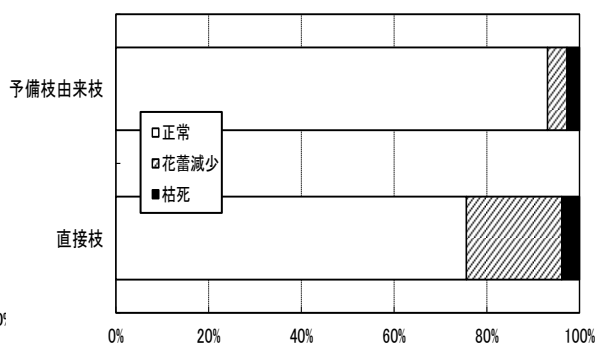


図 2. 「新高」における直接枝と予備枝由来枝の発芽不良発生状況（2014 年）

注 1) 供試樹は「新高」41 年生

☆ 活用面での留意点

1. 長果枝を結果枝として使用する場合は、冬季のせん定時に予備枝を残しておき、予備枝由来枝を確保する必要があります。
2. 詳細については、熊本県農業研究センター果樹研究所（電話：096-248-6411、電子メール：noukenkikaku@pref.kumamoto.lg.jp）にお問い合わせください。

（果樹研究所 企画管理部 研究調整役 井原史雄）